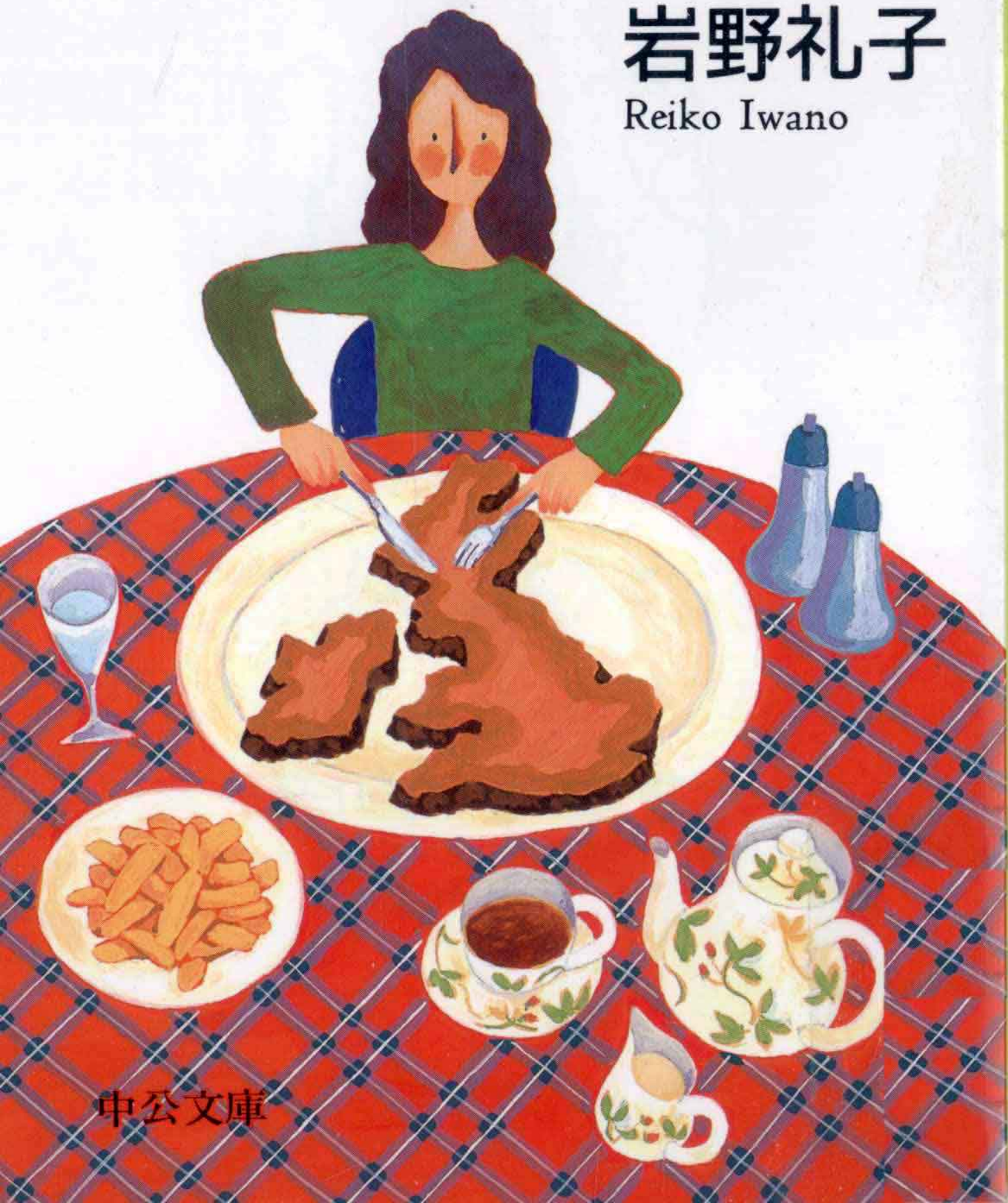
英国解体新書

Deconstructing the English

岩野礼子
Reiko Iwano



中公文庫

中公文庫

英国解体新書（えいこくかいたいしんしょ）

定価はカバーに表示してあります。

1998年3月3日印刷
1998年3月18日発行

著者　岩野礼子（いわのれいこ）

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)　振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Reiko Iwano

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-203090-0　C1195　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

英国解体新書

岩野礼子

中央公論社

英国解体新書＊目次

第1章　大人は、かく振る舞いき

大人(たいじん)の国、英国……12
ガリヴァー隠遁記……17
大「発見」ものがたり……22
VJデーのハトのクソ……26
VJデー狂騒曲……31
イギリス人と英国人……39
I LOVE YOU……44
食肉の人道主義……51
メガトン級の侮辱……57
愛犬物語……63

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Patronizing とおせっかいの狭間で……68
聖母になった月と狩猟の女神……72
もうプレゼントはいらない？……77

第2章 英国紳士に髪結い亭主

紳士たちのいるところ……84
過去に片足……90
のうなしあんよの島で……95
秘密の花園……100
コテージ・ガーデンが好き……105
ハリネズミからのお願い……110
真夜中の緊急事態……115
怪談……121
人生を数字に賭けて……126

借金時代……130
細身が怖い……135
それでもやっぱりサマーホリディ……140
どこまでいけばよいマナー……145
壁に頭を打ちつけて……151
「髪結いの亭主」願望……156

第3章 祖国リリパットに捧ぐ

「ピーターラビット」事件考……162
チャモマイル氏の災難……168
得体の知れない生き物……173
コンドーム王国の危機……178
ねずみ女房の夫婦別姓……183
リリパット国帰省記……189

たかが英語、されど英語……195
南仏プロヴァンスの春……201
たまらなくセクシーな日本人男性……206
スキマ商売……211
床下の小人たち……216
英語俳句の世界に遊ぶ……221
私小説のゆくえ……228

第4章

倫敦〜私のホームタウン〜

ロンドンひとり暮らし術……234
やさしく「脱いで」……240
あざ笑うコンピューター……245
ヴァーチャル・ガーデナー……250
うちのご隠居……255

犬と私の愛ある日々……260
なに食べてるの？……264
だんだんグレイになっていく……271
占い師のシッポ……276
オオカミなんか怖くない？……282
やさしさに飢えた人……287
ローマ時代のロンドンに遊ぶ……292
生きた世界史……297
異邦人の曲がり角……303
将来の夢……308
あとがき　313

写真提供／岩野礼子
編集協力／元気工房

英国解体新書

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第1章

大人(たいじん)は、かく振る舞いき

大人(たいじん)の国、英国

私は英吉利を好きである。自分の意志で選択して、倫敦(ロンドン)に住んでいる。そのへんは、文部省推薦のエリート留学生として倫敦に来たはいいが、現実の英国社会の壁にはばまれて、こんなとこには来たくなかったのに、といういじけの病にとりつかれ、「倫敦(ロンドン)に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり」(『文学論』序)とかなんとか言ったという、ある有名な文豪とは大きく異なっている。

とはいえ、英吉利が好きで長居している私だって、英国人の社会的マナーとしてのフェアプレー精神の陰から見え隠れする、本音としての優越意識が、大嫌いである。

日本人の多くがいまだにあこがれ意識、裏を返せば劣等意識から抜け出せないように、英国人の多くもまた、無意識的で無意味な優越意識の呪縛を解くことができないでいる。

その優越意識だが、大英帝国滅びたのちも、腐ってもタイというべきか、なかなかバラエティに富んでいる。

たとえば、家柄や能力・人格の高さが、身長と体格の大きさに比例するという思いこみがある。これなど、見上げた野放図といえよう、などと思っていたおり、英国でもっともインテリ層が読むとされている日曜日刊の新聞、サンデータイムズ紙に、「ノーム（小人）がハンリー氏の愚弄に激しい反撃」（一九九五年四月二日付）なる見出しの記事が掲載された。

これは、ノームこと、労働党の陰の外相ロビン・クック氏（当時。九七年五月一日の総選挙で、労働党の勝利により現在は堂々、与党の外相）を指して、保守党幹事長（当時）のハンリー氏が、西洋の身長主義とでも呼びたいような差別意識を丸出しにして、「クック氏は身長が一六七センチと低すぎるから、しょせん首相を狙う器ではない」との発言を行なったことが、コトの発端である。

ちなみに、首相の器サイズとは、身長六フィート（一八〇センチ）以上の身長を指す、と類推される。現首相のトニー・ブレアと前首相ジョン・メージャーは、ともに首相の器サイズをクリアしている。一方、その前の首相であるマーガレット・サッチャーは、ハイヒールをはいても、六フィートには遠い。首相の器サイズの発想は、女性蔑視にもつなが

るんじゃないかな。

さて、ハンリー氏の発言は、さすがに政界に物議を醸し出したのだが、だれも実は身長主義そのものの正当性を疑っていなかったという証拠が、この権威あるタイムズ紙の記者による、「ノームが反撃」という見出しの悪ノリ記事なんである。

国家レベルで、こんなバカバカしいギロンに打ち興じるとは、さすが大人（たいじん）の国英国。私は、おおいに心を動かされ、ひと言意見を述べたくなって、サンデータイムズ紙の読者の便りコーナーに以下の手紙をしたためた。

「サー（さあ？　ではなく、Sir で始まるのが慣習）、T・R氏による記事を読みました。基幹をなす、高いほうがエライという西洋の身長主義には、以前から興味をもっておりました。私は身長一五八センチの日本人ですが、不満はなく個人差によるバラエティをむしろ楽しんでおります。

身長主義は、記事中にあるテレビ時代特有の現象ではなく、『狩猟民族の血』に根ざした意識だと思います。それは、単に図体の大きさで他者を威圧するという、本能的かつ原始的なもので、人格や能力のサイズと無関係であることはいうまでもありません。

かくいう私も、西洋の標準より小さいというだけで、見下げられたり見くびられたりしてきました。そういう人々には、私のほうがずっと『地球にやさしい』のだ、と主張した

大人（たいじん）を乗せた馬は難儀そうであった。リージェンツパークでの「馬車」の祭典ひとコマより

い。

理由は、比較すると私はごく少量の食物と空気しか必要とせず、したがって排泄および二酸化炭素の排出量も少なくて済む。ゆえに、地球への汚染度は、ご立派な体格のみなさまよりずっと少ないからです。

小さな人間としましては同時に、この身長主義を逆手に取ることも考えてみました。

たとえば、元相撲取りに日本の首相の座についてもらい、西洋の国家代表たちを物理的に、おおいに見下げてもらってはどうかという案です。

心理的効果は、かなり期待できそうです。元相撲取り氏をサポートする政治のプロ集団がいれば、鬼に金棒、テレビ時代の国際政治の場がさらに楽しくなりそうです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com